



NEW CROWN (三省堂) 採用校の先生より、Let's Read の部分をどのように指導したらよいか頭を悩ませている、という声を聞くことがあります。量が多く、濃度の高い内容の英文を、限られた授業時間で、一文ずつ説明する時間はない、しかし全く無視して飛ばすわけにもいかず、日本語訳を生徒に渡すこともあるようです。日本語訳を渡すことについて、全く異論はありません。どれだけ内容に踏み込めるかは、時間の問題となります。とりあえず読んで、英文の大意を掴むにしても、日本語訳が手元に残らないと、生徒は心もとないものです。ただ生徒が訳を読んで「ふ〜ん」で終わらないよう、しっかり英文と対峙させ、意味を考えさせることが重要です。

ここで、実践活動例をご提案します。昨今、Web 上には無料で使えるオンライン翻訳サイト(翻訳機の機能を持ったサイト)があります。

自力で訳さずに翻訳機を用いることを生徒に推奨するのは、どうも気が進まないかもしれません。しかし翻訳機はご存じの通り、言語力がないことには使いこなせません。翻訳機を通して「あなたたちのほうが翻訳機より英語と日本語の意味がちゃんとわかっているよ」と伝えることができます。以下は NEW CROWN Book 1 の Let's Read 2 “A Girl Saved Many Lives” の最初のパラグラフです。

That Sunday started quietly. Then the earth moved. A big earthquake occurred deep in the ocean near Indonesia. A tsunami started. The tsunami rolled across the Indian Ocean. It killed about 225,000 people that December 26. But on one beach in Thailand, no one died. Why?

これを、ある翻訳機(オンライン翻訳サイト)に入力すると出てきた日本語訳は以下になります。

「その日曜日は静かに始まった。その後、地球が動いた。大地震は、インドネシア近海で深いが発生しました。津波が開始されました。津波は、インド洋

を横断ロール。それは、12月26日を約225,000人が死亡。しかしタイで1ビーチで、誰も死ななかった。なぜ？」

この日本語訳をそのまま生徒に配布します。生徒は、日本語訳をざっと読んだところで、下線部の辺りで必ず「あれ? 何言っているの?」と意味不明なことに気づきます(授業では下線は未記入)。

次に生徒は、読んで違和感がある、もしくは意味不明だった部分に下線を入れます。

その後、教科書を開かせ、各自で初めて英文を読ませます。英語の読解力の高い生徒であれば、ここで、「あ〜」とすぐに翻訳機の間違いに気づくこともあります。Let's Read の語彙欄には日本語がすでにあること、先に翻訳機で大まかな日本語訳を読んで背景を与えられていることが、初見の英文理解の大きな助けとなります。読みながら、日本語で下線を入れた箇所に当たる英語に下線を入れていきます。

「あなたたちの方が、翻訳機より言葉の意味がわかっている。翻訳機の手直しを直してあげてください」と指示をします。ここからは日本語の訂正です。ペアやグループでの作業にすることで、各自の気づきを高め合うことができます。

「インドネシア近海で深いが発生しました」の部分は、教科書の語彙欄の deep の日本語が「深いところで」とあるので、中学1年生の日本語力ならずぐに正しく明確な意味にたどりつけるわけです。

この活動には次の利点があります。

- 日本語訳に対して能動的に取り組める
- 英文に対峙して意味を考えられる
- 背景知識を活性化させて英文が読める
- 単語の複数の意味、文の構造への意識を高められる
- 短時間でまとまりのある文の意味をとらえられる

生徒達のアナログ力(言葉の理解力)が翻訳機に勝っていることが活動の動機づけになります。生徒自身が翻訳機に入力してもよいでしょう。